まがはら

(日置郡金峰町大野)

位置と環境

本遺跡は、北側の標高約60mの独立丘陵から延びてきた傾斜地および南・西側の標高約35m平坦地に所在している。また、東・南・西側の三方側には谷が入り込んでいる。

調査の経緯

尾ヶ原遺跡は、農業大学校の飼料畑として造成工 事により削平される範囲だけを平成12年度に本調査 を実施した。

遺構と遺物

調査の結果,本遺跡からは縄文時代早期・前期・ 中期・晩期と弥生時代中期,古墳時代,古代の複合 遺跡であり,遺構・遺物などを検出した。

縄文早期は、遺跡の一番高い所に集中が見られ、 集石遺構7基を検出し、石坂式土器を中心に遺物が 出土した。

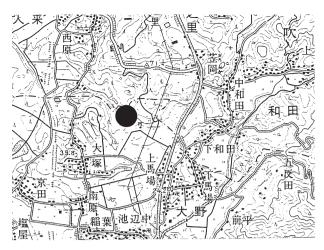
縄文時代前期及び中期は、遺跡の北西端部に集中 し、曽畑式土器・深浦式土器・春日式土器などが出 土したが、出土量は多くなかった。

縄文時代晩期は、全般的に出土したが、南西部から北西部の平坦部分に多く出土した。遺構は深鉢形土器が埋設された遺構2基を検出した。また、扁平打製石斧と石錘が多く出土するなど特徴的である。さらに、石器が2点から4点まとまって出土することも特筆すべきことである。土器は、上加世田式・黒川式土器等が出土した。

弥生時代は、中期の遺物が出土したが、量は多くはなかった。遺構は、遺跡の中の高い所で小児用合口壺棺を検出した。合口壺棺は、径50cmの土坑内に黒髪式の壺形土器を納め、上に須玖式(丹塗り)の壺形土器をかぶせてあった。これらは、中九州・北九州を中心に分布する土器で、当時の広い交流がうかがえるものである。

古墳時代は、竪穴住居跡8軒を検出した。

 $1 \sim 7$ 号住居跡は南側の平坦部に並ぶような状況で検出したが, 8 号のみは傾斜地において検出し, 1 号 ~ 4 号住居跡からは多量の遺物が出土したが,



第1図 尾ヶ原遺跡の位置

その中に須恵器が混入している。須恵器は須恵器 II 式に比定できるもので、吹上小中原遺跡 4 号住居跡 出土の須恵器 I 式とも合わせ、南九州特有の成川式 土器の年代を考察する上で指標となるものである。

(中村耕治)

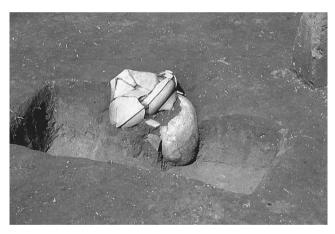


写真 1 小児用合口壺棺

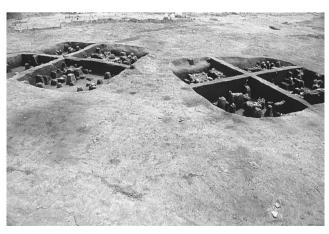


写真 2 3 · 4号住居跡